定住型[1]非母語話者のスピーチレベルシフト
ー共生日本語からの一考察ー

OHRI Richa[2]

要 旨

多言語化・多文化化していく日本社会の目指す言語的な方向性を築く手がかりを探ることを最終的な目標とし、本稿では、コミュニケーションストラテジーとして使われているスピーチレベルシフトを例に取って接触場面における共生日本語の一側面の解明を目指した。共生日本語とは、接触場面において参加者の協働の結果新たに生み出される「内容」を言語的に担うものであるとされている。本稿では、接触場面におけるスピーチレベルシフトが実現するものを「内容」と捉え、その「内容」の解明を試みた。会話データの分析の結果、接触場面における非母語話者のスピーチレベルシフトの要因として、①「アドレス」、②「心的態度」、③「力関係」の三つが示され、それぞれが、①「オンステージの明示」、②「心的距離の短縮」、③「母語話者への感謝の気持ちの表示」や「日本語・日本文化の教示の要請」を実現していることが分かった。共生日本語は、接触場面において定住型非母語話者がとるコミュニケーションストラテジーの側面を持つことから、母語話者のそれへの理解や受容していく姿勢が望まれることを指摘した。

【キーワード】定住型非母語話者、接触場面、共生日本語、スピーチレベルシフト、
力関係

1. はじめに

言語は、文化の中で多様な性質をもち、その言語で構築される会話は創造的につくりあげられる参加者の共同的なプロセスを反映するものと言える。文学批判の分野で活躍したバフチンは「社会的言語的多様性」という概念を導入して、言語において必要な複雑性をあつかう道を開いた。この概念を日本社会に置き換えてみると、そこでは例えば、「一つの日本語」が話されるのではなく、「様々な日本語[3]」が話されている、ということになる。では、現在の日本社会の状況を考えてみよう。近年、定住型非母語話者（以下、非母語話者）が増加している。こういった状況の中で、日本語母語話者

（以下、母語話者）と非母語話者が共生するために媒介言語として用いる日本語、いわば共生日本語が重要な意味をもつと考えられる。岡崎（2003b）は、共生日本語は母語話者の頭の中に内在化された日本語ではなく、接触場面におけるやり取りを通して、そのプロセスの中でその都度生み出される「内容」を言語的に担うものであると指摘する。

しかしながら、現在の日本社会における共生日本語のあり方には疑問を持たざるを得ない。なぜならば、アメリカでは「様々な英語」が存在し、それぞれが確立したアイデンティティを付与されているのに対し、日本ではまだ共生日本語が「様々な日本語」の一つとして市民権をもっているとは言えない。換言すれば、まだ一つの確立したアイデンティティを持つ「日本語」と言えるまでに至っていない。結果として、一生日本で生活していく定住型非母語話者であっても「一つの日本語」の獲得を目指さなくてはならない。これは、非母語話者の日本文化への同化につながり（岡崎 2003a）、人権侵害でもあると言えないだろうか。したがって、「様々な日本語」の一つとしての共生日本語の必要性が浮かび上がり、母語話者のそれへの理解や受容していく姿勢を育てていくことが望まれる。

共生日本語への理解のためにまず接触場面におけるやり取りを通してそのプロセスの中で新たに生み出される「内容」や「言語」はどのようなものなのか、その記述が必要となってくる。本研究では、この「内容」や「言語」を記述するべく、まず、スピーチレベルシフトに着目する。接触場面におけるスピーチレベルシフトという「言語」形式を通して実現されている内容は何なのか、それをスピーチレベルシフト生起の要因と機能と捉え、要因と実際に果たされている機能を明らかにすることで、「内容」の解明を試みる。これによって、非母語話者が「言語」を使って、実現しようとする「内容」に焦点を当てることができると考えるからである。こうすることで、接触場面におけるやり取りを通してそのプロセスの中で新たに生み出される共生日本語の特徴が記述[4]でき、「様々な日本語」への扉が開かれると考える。

2. 先行研究

スピーチレベルシフトとは、同一話者の同一会話内における敬体の使用から不使用、あるいは、その逆の移行を意味する。スピーチレベルシフトの研究の土台ともいえる生田・井出（1983）では、母語話者の談話におけるスピーチレベルの選択が行われる際、

スピーチレベルシフト生起の要因に優先関係があるとされている。まず、談話全体で主体となるスピーチレベル（基本スピーチレベル）が社会的コンテクストによって決定される。その上で、話者の心的態度と談話の展開という二つの要因が次に働く。後者の場合、話者の心的態度が談話の展開を優先するとされている。この研究をきっかけに、Hashimoto（1992）や宇佐美（1995）は、2 者間のスピーチレベルシフトの要因を詳しく述べている。他方、岡本（1997）はスピーチレベルシフトの要因だけではなく、スピーチレベルシフトの指標的機能が母語話者同士の相互行為にどう影響しているのかを明らかにした。さらに、森下（1997）、杉山（2000）はミーティングやグループ討論場面を公的と非公式という場面のフレームで説明しており、発話アドレス、フレームとスピーチレベルシフトの関わりを見た。

接触場面におけるスピーチレベルシフトの研究としては上仲（1997）と佐藤（2000）が挙げられる。これら 2 つの研究は、日本語学習者のスピーチレベルシフトを母語話者のそれと対照することで、学習者にまだ完全に習得されていないものを解明し、その結果から指導項目を抽出し、「日本人の生の会話」スタイルを習得させることを目標としている。このような研究は、非母語話者を「一つの日本語」に近づけさせるためのものであるといえよう。しかし、共生日本語を論じる場合、焦点を「一つの日本語」から「様々な日本語」へシフトさせる必要があり、接触場面における非母語話者の日本語（スピーチレベルシフト）自体の解明に重点をおいた研究が重要である。

3. 研究目的と研究方法

3.1 研究目的と研究課題

本研究は、接触場面における非母語話者のスピーチレベルシフトに着目することによって共生日本語の特徴の一つを記述することを目的とする。そのため、第一に、接触場面における非母語話者のスピーチレベル及びそのシフトの実態を明らかにすること、第二に、スピーチレベルシフトによって非母語話者は談話進行上どのようなことを実現しているかを探ることを具体的な研究課題として設定した。

3.2 研究方法

(1) フィールドの概要

本研究の対象は、地域日本語教育で提案されている母語話者と非母語話者の対話を通じた相互学習の場（以下、対話の場とする）である。対話の場は、地域に住む母語

話者と非母語話者が地域社会で生活する上で抱えている様々な問題を共有し、対話を通じて何らかの解決のきっかけをつかもうとして始めたものである。2000 年 12 月から 2 週間に 1 回 2 時間、東京都内某大学に集まり、個人が問題に感じていることや他の参加者に提起したいことなどを「トピック[5]」として持ち寄り、対話を行っている。

(2) データ

本研究では 2000 年 12 月から始まった対話の場の以下の 3 回の会話データを主なデータとして分析する。この会話データは録音によって収集した。録音したものはすべて文字化し、観察記録やメモと合わせて分析を行った。(以下、F は非母語話者を意味し、数字は個人番号である。文字化の記号については、本稿末に記載している)。

日程	話題	話題提起者
2001 年 3 月 27 日	子供の教育について	F3
2001 年 8 月 30 日	お金の貸し借り	F4
2001 年 9 月 27 日	わが家の知恵袋	F1

上記のデータを取り上げる理由は、本研究が対象とする非母語話者が話題提起という役目を担っている回であるからである。よって、話題提起者である非母語話者がその場の全員に向けて話題提起をする際用いるスピーチレベルシフトと、その中で一時的に少人数と対話をする際に使用するスピーチレベルシフトのより詳細な記述が可能になると考える。以下、対話の場の参加者のプロフィールを示す。

表 1：母語話者のプロフィール

年齢	20 代－70 代
性別	女性 9 名、男性 1 名
社会的地位	定年退職者（元会社員）、パートタイマー、専業主婦、学生

表 2：非母語話者のプロフィール

出身国	イラン、中国、フィリピン
年齢	30 代－40 代
性別	女性 3 名[6]
社会的地位	パートタイマー、自営業者、専業主婦
日本在住暦	5 年～17 年
日本語学習暦	自然習得[7]（上級話者）

4. 分析結果と考察

4.1 非母語話者の基本スピーチレベル

基本スピーチレベルは母語話者の場合社会的コンテクストによって決められるという（生田・井出 1983）。非母語話者の場合はどうだろうか。本研究のデータで観察された非母語話者のスピーチレベルは殆どの場合「0 レベル」が維持され、母語話者のように社会的コンテクストによって一定のレベルが決定され維持されるということは認められなかった。したがって、基本レベルは社会的コンテクストに影響されず常に「0 レベル」であると考えることができる。そして、この基本の「0 レベル」から「＋レベル」へとシフトすることが観察された。したがって、ここでは、「＋レベル」へのスピーチレベルシフトの例を挙げながら、その要因と機能について考察を進める。単語レベルにおけるレベルシフトは本研究のデータには殆ど観察されなかったので、今回は記述及び考察の対象から外す。

4.2 スピーチレベルシフトによって実現されていること：生起の要因とその機能

非母語話者の「0 レベル」から「＋レベル」へのシフトのケースを分析した結果、スピーチレベルシフト生起には次の三つの要因が関係していることが推測された。それらは、①アドレス、②心的態度、③力関係である。以下、この順番で詳しく見ていく。

(1) アドレス：「オンステージであることの明示」

アドレスとはバフチンが導入した概念で、話し手が誰にむけて発話しているのかということを意味する。発話のアドレスが参加者全員に向けられている話題提起などの場合、母語話者は「＋レベル」を基本スピーチレベルとして用い、この「＋レベル」のスピーチレベルが話題提起の最後まで維持される。本研究の母語話者のデータにおいても発話のアドレスが全員に向けられている際には基本スピーチレベルが「＋レベル」で一定することが観察された。これに対し、非母語話者は、話題提起をする際、発話のアドレスが全員に向けられているのにも関わらず、基本的に「0 レベル」が使用されていた。ただし、話題提起の談話の最初と最後を「＋レベル」で括るというスピーチレベルシフトが観察された。以下に、その例を会話例１として示す。

会話例１　この会話例は F４がお金の貸し借りについて全員に向かって話題提起をしている場面である。

1F4:　今日のテーマはね、あの、お金のことについて。私日本に来て一番印象的のことです。4つありますからね。最初、私今全部話して、みなはね考えてこのこと続けてもいいとか、間

違いとか、ちょっと検討しましょうね。

最初日本で始めてきたときアルバイト先の社長さんね、だからあの、印刷会社だったのね。あの時あの機械足りなくてあ・・5 百万の機械入る予定だったのね。お金ないから、あの、社員に、日本人にね、社員にお願いして誰も出してあげなかったの。だから、あの、社長と私相談して００さん、ちょっとてつだ・あ・なんか・あ・・なんか・{笑い} 日本語がちょっとね、あの、もしできればお金ちょっと貸していいとか相談してきたの。・・・・・・・・・・・・・

省略。

今日の話はね、感動することとお金こと、あの一二種類で、うん、これだけかな。みんなさん、ちょっと検討してください

2 数人：{拍手}

3J3：あ、すごいね。あ、これ違うんだ

会話例 1 では、参加者全員を対象として話題提起をしていることから発話のアドレスは全員に向けられている。先にも述べたように、母語話者は、この場合一貫して「＋レベル」を用いる。しかし、F4 は「0 レベル」を用い、一部で「+レベル」へのシフトが確認される。その一部とは、話題提起の最初と最後であり、話題提起の談話を「+レベル」で括っていると言える。ここでのスピーチレベルシフトは「語りの最初と最後を「＋レベル」で括ることによって「全員に向けての発話つまりオンステージの発話であることを明示」していると考えられる。つまり、非母語話者は自分の限られた言語資源を使って目的を達成するためにスピーチレベルシフトを駆使しているという点で、一つのコミュニケーションストラテジーと言うことが出来る。

(2) 心的態度：「心的距離短縮の表示」

生田・井出（1983）は、母語話者は談話内で相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度の変化を表明するためにスピーチレベルをシフトさせると指摘する。「0 レベル」へのシフトは心的距離の短縮、つまり同調や支持の気持ちを表し、「＋レベル」へのシフトは心的距離の伸長を表すとされている。本研究のデータでは前者のケースだけが観察された。シフトは「＋レベル」へのシフトだけが観察され、これにより母語話者への親しみや共感の気持ちを表していることが推測された。以下にその例を会話例 2 として示す。

会話例 2　会話例 2 は F4 が「+レベル」へのシフトによって心的距離の短縮を表したと考えられる発話事例である。F4 が「そうですね」を使うことによって J6 の発話への支持の気持ちを表明

していることがうかがわれる。

1J6：あ・そしたら、例えば日本人に対しては、自分がその勉強する時は、ほとんど勉強するんだと思うからその一

2F4：ちゃう、あのー　「0 レベル」

3J6：気・気を使わないんだよね？

4F4：そうですね　「＋レベル」

もちろん F4 は「そうですね」を慣用的なあいさつことばとして使ったという可能性も考えられる。しかし、他の場面における発話例をみると、F4 は中立的な同意などを表すためには「そうね」や「そうだよ」のような言い方を多くしている。このことから、上の会話例 2 のように相手への共感を表す強い支持の気持ちを「そうですね」の「＋レベル」へのシフトによって表していると推測される。一方、非母語話者の心的距離の伸長を表すものとして解釈されるような「＋レベル」へのシフトは今回のデータでは観察されなかった。

したがって、母語話者とは反対に「＋レベル」へのシフトに心的距離の短縮を示す機能を持たせていることが考えられる。これは、言語資源として「＋レベル」を殆ど持たず「0 レベル」に限られている中で、心的距離の変化を示す手段として、母語話者の言語ルールからすれば異質な「＋レベル」へのシフトをとっていると解釈されよう。
このように「＋レベル」にシフトすることによって相手への距離を短縮させる事例には「私もそう思います」などのように強く同感を示すと解釈される「＋レベル」が数多く観察された。上記の(1)同様に、母語話者に対する親しみや共感を表すためのコミュニケーションストラテジーとして「＋レベル」へのシフトが使用されていると言えよう。

(3)　力関係：「母語話者への感謝の気持ちの表示」や「日本語・日本文化の教示の要請」

今回の会話データからスピーチレベルシフトのもう一つ重要な要因として母語話者と非母語話者の間にある力関係が浮き彫りになった。ここでいう力とは、コンテクストごとに規定されるもので、そのコンテクストや状況が生み出したものであり、社会学的に規定されるような権力とは異なる。

非母語話者が持つ文化や言語の面での「知識の枠組み」(knowledge schema：Tannen 1993) は母語話者のそれとは異なる。これは、医者と患者の持つ知識の枠組みの違いにも例えられる。Tannen (1993) はこのような知識の枠組みの違いを「分岐した知識の枠

組み」（divergent knowledge schema）と名づけている。日本語母語話者と非母語話者の接触場面においては双方の持つ日本文化・日本語の知識の枠組みの違いによってパワーダイナミックスが生じ、両者間に力関係を生じさせる。この力関係が、スピーチレベル及びそのシフトにも現れると推測される。

このような力関係が生じる要因は、母語話者・非母語話者の両者にあると考えられる。例えば、母語話者は、日本語・日本文化が自分の母語・母文化であることから、それについて非母語話者に教えることや、非母語話者のそれについての知識の上達を評価することが親切で当然のことであるかのように理解することが多い。一方、非母語話者は母語話者を日本語・日本文化の権威（authority）として位置づけ接する傾向があり、日本語・日本文化のこととなると教える側・教わる側の関係性がはっきりと意識されることになる。

本研究のデータから、力関係は、母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動と、非母語話者の母語話者に日本語・日本文化について「教示を要請する」という言語行動として表れやすいことが示された。ここでいう母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動とは、非母語話者の日本語に対する評価や母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合のその行動に対する評価のことを指す。非母語話者の「教示を要請する」という言語行動は特に日本文化・日本語について尋ねるときや日本語が理解できないときのことを指す。

まずは、母語話者の非母語話者への「評価」の言語行動を、①非母語話者の使う日本語に対する評価と、②母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合の会話例を会話例3と4として以下にこの順番で示す。

会話例3　会話例3は、非母語話者の日本語に対して母語話者が評価をした事例である。非母語話者の日本語が母語話者に評価され、その後非母語話者 が「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせる場面である。

1J10：なんか、ちょっと違いません？

→2F3：そんなことないもんね　　「0 レベル」

3J3：いや、でもおとなしかった｛笑い｝

4J10：すごいさ、ゆったりとか

→5J6：はっきり言っていつもの F3 と比べたらというのもあるけれども本当に日本人と同じ感じがする

6J3：そう、そう、そう、そう

→7F3：そんなことないですよ　　{笑い}　　「＋レベル」

J6 の発話 5「日本人と同じ感じがする」は言語形式だけに注目すると単なる評価に過ぎない。しかし、これは実際は母語話者にしかできない言語行動である。なぜならば、評価をするためには評価者として認められたそれなりの「資格」が必要であるが、日本語・日本文化の「権威」である母語話者はその「資格」を持っていることが暗黙の前提とされていることが分かる。これは学校場面に例えると、教師は生徒を「よくやったね」と評価しても、学生が教師に対して「よくやりましたね」と評価をすることはあまりないことと同じことである。会話例 3 の場合、7F3 は「評価できる資格を持つ母語話者の知識の枠組み」に自分は一歩近づくことができたこととして感謝の気持ちを照れ笑いしながら表し、スピーチレベルを「＋レベル」シフトさせたと考えられる。

この発話例と同じようなコンテクストで例えば着ている洋服などがほめられた場面では「＋レベル」へのシフトは観察されず、日本語が評価される場面に限って非母語話者の「＋レベル」へのシフトが確認された。また、他の非母語話者の場合であるが、日本について日本人よりよく知っていると評価され、「いえ、とんでもないです」のような「＋レベル」へのシフトの例も確認された。

非母語話者はこのようにスピーチレベルを「＋レベル」にシフトさせることによって、母語話者への感謝の気持ちを表示していると考えられる。

次に、母語話者が相応しいと思うような行動を非母語話者がとった場合のその行動に対する評価の事例を会話例 4 として以下に示す。

会話例 4　F4 が日本人と一緒に働いてきて感動したときの話をする場面である。

1F4:あ、そう　　「**0** レベル」

→2J4：でもね、これやっぱりね、あなたがすごく素直な方だからね、みなさんが日本人の人でもそりゃ悪い人もいればいい人もいる。世界中皆同じだと思うけど、そのあなたの素直さに日本人は感動しているのよ

→3F4：あ、ありがとうございます　　「＋レベル」

「0 レベル」を基本レベルとして用いる F4 が、2J4 の「あなたの素直さに日本人は感動しているのよ」に対して「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせたことは注目すべきことである。ここでは 2J4 は F4 の「日本人を感動させた行動」を評価してお

り、そのような評価に対する感謝の気持ちを表すために F4 は「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせたと解釈される。

会話例 4 においても会話例 3 同様、非母語話者は「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせることによって母語話者への感謝の気持ちを表していることがわかる。ここに力関係を協働で構築していることが分かる。このような母語話者の「評価」に対する非母語話者の「＋レベル」へのシフトは、会話例 3、4 以外にも、本研究のデータでは多数確認された。

次に、非母語話者が日本語・日本文化についての教示を要請する場面におけるスピーチレベルシフトの例を会話例 5 として示す。

会話例 5　基本レベルが「0 レベル」である F4 が日本語のことばを母語話者に対して確認している場面である。

→1F4：でも話しないときもある。私はね、三日間前にあのこう電話あったのね、もう一年以上会ってないの日本人ですから、だから私に電話して、あの漢方薬の私前漢方薬やっていたから「F4 さんいい漢方薬ないかな」と自分の子ども、あの中学校で妊娠したのね。だからおろ・おるすですか？　「＋レベル」

2J1：うん

会話例 5 では、1F4 は「おろす」という言葉が正しいかどうか自信がないようである。そしてその言葉が正しいかどうかを尋ねている。そのとき、「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせている。言い換えれば、普段 J1 に対して「0 レベル」を用いる F4 だが、日本語について尋ねるときには「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせるのである。日本語以外のことで例えば「○○までの行き方を教えてほしい」などの場合は「＋レベル」にスピーチレベルをシフトすることはなく、「0 レベル」で会話を続けている。ところが、日本語のこととなると日本語・日本文化の「権威」である母語話者に教えてもらうため、スピーチレベルの丁寧度をあげて「＋レベル」にシフトさせるのである。したがって、このスピーチレベルシフトは、日本語・日本文化についての教示を要請するという機能を果たしていると考えられる。

今回の会話データでは、非母語話者は日本語・日本文化について尋ねるときや日本語が理解できないときは、ほとんど「＋レベル」にスピーチレベルをシフトさせていた。この現象は本研究の対象者に共通して現れ、様々なバリエーションも確認された。特に、「もう一度お願いします」や「○○は日本語でなんと言いますか」のような「＋

レベル」へのシフトが多かった。日本語・日本文化以外のことで尋ねるときには「0 レベル」のままで会話が続けられていること、及び、この 3 人は教室習得ではなく自然習得であることから、教室における決まり文句や慣用表現を使っているとして捉えるより、意図的なコミュニケーションストラテジーとして捉える方が妥当であろう。

5. まとめ

以上の分析結果を総合的に考えると、非母語話者はスピーチレベルシフトを一つのコミュニケーションストラテジーとして使っていることが分かる。会話例が示すように、シフトの仕方は偶然或いはたまたまそうなったわけではなく、非母語話者は、意識してスピーチレベルをシフトさせており、そしてそのシフトによって言語資源に限りのある非母語話者は限界を補償しながら多くのことを実現している。本研究の対象者に共通する結果として、次のようなことが挙げられる。

1) 本研究が対象とした非母語話者のスピーチレベルは、社会的コンテクストの影響を受けず、誰に対しても、どこでも「0 レベル」を基本スピーチレベルとして用いている。その理由としては、次の 2 点が考えられる。①実生活の中で得るインプットが「0 レベル」に限られていることである。家族は彼らに対して「0 レベル」を専ら使う。家族以外に幅広い年齢層との社会的な接触がなく、したがって、自分に対して「＋レベル」が使われる場面は少ないと考えられる。②また、彼らは自然習得者であるため、彼らが使用する共生日本語はこのような周りの言語環境に大きく規定されると考えられる。

2) 本研究が対象とした非母語話者は、発話のアドレスが全員に向けられていることを示す際に、談話の最初と最後の部分を「＋レベル」で括るというスピーチレベルシフトを行うことによって、オンステージであることを明示することに成功していると言えよう。

3) 本研究が対象とした非母語話者は、スピーチレベルを「＋レベル」にシフトさせることによって、母語話者との心的距離の短縮を図っていることがわかった。これは、母語話者が「0 レベル」にシフトすることによって話し相手との心的距離の短縮を図る（生田・井出 1983）こととは逆のシフトの仕方である。

4) 本研究の分析結果から、非母語話者のスピーチレベルシフトの新たな要因の一つとして力関係の存在が浮き彫りになった。非母語話者は「＋レベル」にスピーチレベ

ルをシフトさせることによって、母語話者への感謝を表明したり日本語・日本文化についての教示を要請したりしていることが分かった。

以上、非母語話者のスピーチレベルシフトの実態とシフトによって非母語話者が実現していることを探った。このようなシフトのあり方にこの場面における共生日本語の特徴が示されていると言えよう。本研究の対象者は僅か 3 名に過ぎない。しかし、スピーチレベルシフトの実態とそれが実現していることについては 3 名に共通して現れており、見過ごせない、興味深い現象といえる。また、接触場面における力関係の存在、そしてそれがスピーチレベルシフトの要因になっていることも提示された。

非母語話者の日本語は共生日本語であり、必ずしも母語話者の話す「一つの日本語」と同様の形式ではなく、限られた言語資源を補償するコミュニケーションストラテジーという側面を持つ。岡崎（2001）は共生言語なしには、言語集団ごとに孤立し相互に接触できず、相互に分離独立し合うか、あるいは社会的地位の高い言語集団がほかの相対的に小さい言語集団に同化を強制するかという選択しかないと指摘している。つまり、共生日本語なしには非母語話者は日本社会に同化するしか選択肢がなくなるといえる。新世紀の先端を行く日本社会にとってはこれ以上悲劇的なことはないといっても過言ではないだろう。

文字化記号の説明

F:　非母語話者	J:　母語話者	‥‥：ポーズ	@：聞き取り不能
(　)：省略	{　}：非言語行動	、：区切り	?　：アクセント上昇

注

(1) 日本に中・長期或いは永住を志向する非母語話者のこと。

(2) rgohri@aa.bb-east.ne.jp

(3) 例えば、言語の多様性を考えた場合、アメリカなどでは様々な英語が話されている。

(4) 本研究で記述しようとするものはあくまでもスピーチレベルシフトという切り口から見た共生日本語であり、そのすべてを説明しようとしたものではない。

(5) トピックの命名は話題提起者によるものである。

(6) 本来の非母語話者参加者は 5 名だが、うち 1 名は筆者なので研究対象としない。もう一人は定住型ではないため研究対象としない。

(7) 3 名のうち 1 名は地域のボランティア日本語教室に不定期的に通っている。3 人とも OPI で上級とされている。

参考文献

(1) 生田少子・井出羊子(1983) 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12－12、大修館書店

(2) 上仲淳（1997）「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト－日本語母語話者との比較考察－」『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念』凡人社

(3) 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第 662 号、27－42 昭和女子大学近代文化研究科

(4) 岡崎眸(2001)「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」『多言語・多文化を切り開く日本語教員養成－日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学日本語教育コース

(5) 岡崎眸(2002) 「共生言語としての日本語教育実習」『多言語・多文化社会を切り開く日本語教員養成－日本語教育実習を振り返る－』お茶の水女子大学平成 11～13 年度研究成果報告書

(6) 岡崎眸（2002）「内容重視の日本語教育」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社

(7) 岡崎眸（2003a）「共生言語としての日本語－教育実習への歩み」『多言語・多文化社会を切り開く日本語教育と日本語教員養成に関する研究－日本語教育実習を振り返る－』お茶の水女子大学平成 14 年度研究成果報告書

(8) 岡崎眸（2003b）「内容重視の日本語教育と文化教育－多言語・多文化共生社会における日本語教育の視点から－」『21 世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ』第 4 号

(9) 岡本能里子（1997）「教室談話における文体シフトの指標的機能_丁寧体と普通体の使い分け」『日本語学』16.3、39－51

(10) 荒木華英、Ohri Richa 他（2001）「多文化共生を目指した継続的対話の場の試み」『国際日本語学シンポジウム新しい日本学の構築Ⅲ報告書』

(11) Ohri Richa (2001)「母語話者との相互行為における非母語話者のスピーチレベルシ

フトーframe と knowledge schema の観点からー」お茶の水女子大学大学院日本語教育コース修士論文
(12) 佐藤勢紀子（2000）「日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構」『平成 10 年度～平成 11 年度文部省科学研究費補助金基盤研究』東北大学留学生センター
(13) 杉山ますよ（2000）「学生の討論におけるスピーチレベルシフトー丁寧体と普通体の現れ方ー」『別科論集』第 2 号大東文化大学別科日本語研修課程
(14) 南不二男他（1974）「敬語の体系」『敬語講座ー敬語の体系』明治書院
(15) 森下雅子（1997）『制度的な相互行為ー日本語ボランティアグループのミーティングー』お茶の水女子大学大学院日本語教育コース修士論文
(16) Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*. New York: Harper and Row
(17) Hashimoto, I. (1992) The function of honorifics as Japanese conversational strategy. BA Thesis, Japan Women's University
(18) Morris, Pam. (1994) *The Bakhtin Reader*. London: Arnold Publishers
(19) Tannen, D. (1993) *Framing in Discourse*. New York: Oxford University Press

Speech level shift of permanent foreign residents : focus on Japanese as a symbiotic language

OHRI Richa

With an influx of Japanese speaking permanent foreign residents, the concept of "one Japanese" is no longer valid. In order to create a multilingual, multicultural society we have to make place for different kinds of Japanese or Japanese as a symbiotic language (hereto referred to as JS). This paper is an attempt to list down some of the features of JS. In order to list down the features of JS, I focused on speech level shift (hereto referred to as SLS) of non-native speakers of Japanese. As a result, I was able to point out three reasons for their SLS and its functions. The three main reasons for SLS were: 1)speech address, 2)change in psychological behavior and, 3)power relations. These reasons had the following functions respectively. 1)acted as an on-stage marker, 2)expressed the feeling of closeness toward native speaker, and 3)expressed the feeling of gratitude toward native speaker.

(Graduate school, Ochanomizu University)